



162号

2011/4/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>

Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp

◆‘わんりい’事務局の住所表記が上記になりました。

被災地・被災者の皆様に心からお見舞い申し上げます



「Mama Othaya(ママ・オザヤ)の素敵な笑顔」 於:中央ケニアニエリ県 撮影:ガスパレイ・ミグィ・キルス

‘わんりい’ 162号の主な目次

北京雑感 (53)北京の夏	2
私が調べた諺&慣用句 (1)「虎穴に入らずんば」.....	3
媛媛讲故事 (33)怪異シリーズ②杜子春1.....	4
フィールドノート (8) 鎮魂歌	6
アジアを読む (75)「西の魔女が死んだ」.....	9
松本杏花さんの俳句集・千里同風より	9
農民画 (18)	10
スリランカ紹介 (46) スリランカの世界遺産⑧ゴール ..	11
福建見聞録 (5) 中国で見かけた不思議な日本語	12
黄土高原・やぶにらみの旅 (6).....	13
中国・都市(都市)めぐり (4) 大連市②	16
私の四川省一人旅 (44)理塘の街で④神の岩山と鳥葬の丘Ⅱ ..	17
アフリカとの出会い (51)「アフリカ人の底力」	21
【活動報告】YeLinさんと‘キャラクター弁当’を作ろう! ..	22
わんりい 掲示板	22

【写真説明】

毎号の‘わんりい’にアフリカンコネクションの竹田悦子さんアフリカでの体験を紹介くださっている。今月号の表紙は、2011年新年号で紹介された、ケニアの肝っ玉母さん・ママ・オザヤだ。

ママ・オザヤは、子供を産めない体で生まれついた。アフリカでは、子供を産めない女性の生活は厳しく難しい。しかし、彼女は「すべては神が決めたこと」として笑顔を決やさず、手仕事で身を立て、農作業で忙しい子供たちのお母さんに代わって、学校帰りの子供たちの為に私財を投じてお昼を用意し続け、数えきれないほどの子供たちを親身に面倒を見、育ててきた。

ママ・オザヤに育てられ、成長した子供たちは、感謝を込めて、ママ・オザヤの活動を支援するという。

勿論、私を含めた誰でもがママ・オザヤになれるわけではない。けれども、ちょっとママ・オザヤになって、自分の周辺を見回したいと思う。 (田井)

今回の東北地方太平洋沖大震災の災害は、1000年に一度といわれる未曾有の大災害となりました。利便と豊かさを追い求めてきた文明は、災害の予知も、防御も出来ませんでした。被災地では更に、原発事故という文明による追い打ちを掛けられています。未来に繋がる世代が安全で幸せである為に、私たちは日々のあり方を反省し、深く考える時に来ているのだと思います。田井

3月11日の東北関東大地震は大変な被害をもたらしました。被災者の皆様に心からの御見舞いを申し上げます。私達が出来ることは、風評に踊らされて無用な買占めなどに走らず、節電に協力して、遠くから被害地域の復興を見守ることでしょうか。

今年、日本の春は、地震に限らず、天候も凄まじいものでした。“三寒四温”どころか、“三凍四暑(?!)”とでも言いたいような激しい気温変化が続いています。桜の花は、春先の気温の累積で開花時期が決まると聞いたことがあります。今年のような気温変化では、桜も気温の足し算を間違えて、狂い咲きをするのではないかと心配してしまいます。

この荒々しい気温の変化で、私は北京の春を初めて体験した時のことを思い出しました。4月初めの清明節の頃に北京へ行ったのですが、まだ薄ら寒くて、薄手ながらコートをしっかり着なければなりません。しかし、3,4日過ぎたある日、朝から太陽がしっかりと出て暖くなり、昼頃には暑く感じる程になりました。朝からコートを着て外出した私は、バス停でジリジリと言いたくなるような強い日差しに照らされて、汗だくでバスを待っていましたが、ふとまわりを見渡すと、多くの人が薄手の衣服を着ており、中には半袖や袖なしブラウスを着ている若い人たちも見かけました。北京の人々は、朝の太陽の様子で、このように暑くなることを予想したようです。

日本でも時々、前日より十数度高くなったり、低くなったりすることがありますが、北京では一度高くなった気温は下がることなく、そのまま初夏になだれ込んで行きました。私にとっては初めての北京でしたから、その時、北京には春が無いのではないかと感じたものでした。

夏になると、朝から陽の光が強くなり暑い日が続きますが、殆ど毎日、3時過ぎには激しい夕立がありました。時間は30分足らずですが、その激しさは日本の夕立とは全く違い、傘を差して歩いたら傘の布地が破れてしまうのではないかと思えるほどでした。そして、この夕立の後には、暑さが収まって、大分過ごし易くなります。暑さが収まった処で、小区の屋外にテーブルを出して将棋やマージャンを楽しむお年寄りを大勢見かけました。

北京では、夏の日中、暑い太陽に照らされても日陰にはいればふっと涼しくなり、しばし暑さを忘れることが出来たので、この夕立後の涼しさと共に、北京の夏は東京よりずっと過ごし易いと思ったものでした。

また、8月末になると、どんなに残暑が厳しくても、立秋の声を聞くと朝夕涼風が立つようになり、1週間もすると夏の衣服では寒く感じるようになります。このと

きも、一度涼しくなると再び暑くなることはありませんでした。そんな訳で、初めて一年を過ごして見て、“北京の天気は荒っぽいな”と感じたのですが、ここ数年の日本の天気も、その変化はかなり荒っぽくなっていると思います。勿論、その内容は大分違います。日本では気温の上がり下がりのみが激しくて、季節は行きつ戻りつで足踏みしますが、北京の季節はキッパリと進みます。その進度が速く、春と秋が短いので初めての時は余計印象的だったのでしょう。

ご存知のように、北京の冬は日本の関東地方と比べると格段に厳しいものです。足許から寒さがしんと這い上がってくるようで、冬の外出は気が進みませんが、部屋の中はスチームが通っていて快適です。冬でも薄着で生活でき、ベランダもガラスで囲われているので、洗濯物もよく乾きます。

夏の気温は東京より随分高いのですが、先にも書きましたように、空気が乾燥しているせいで、日陰に入ると涼しくて、東京の夏よりずっと過ごし易く感じました。夏は北京で過ごすのが一番と思ったものですが、これは2001年から2002年頃までの話です。

2005年か2006年の初夏、朝目が覚めてみると雨がしとしとと降っていて驚きました。私はその時まで、北京でしとしとと降る雨に遭ったことがありませんでしたけれど、この時は日本の梅雨のような雰囲気、暫し、北京にいることを忘れてしまいました。それ以来、このような雨が時々降るようになり、それと同時に、北京のさっぱりした夏が消えてしまったような気がします。あの凄まじい夕立にも久しく遭っていません。

最近の北京の夏は、東京と同じようにむしむしとして、気温が高い分東京辺りよりも厳しい暑さと言えるようで、身体に大きな負担を強いる夏になってしまいました。やはり、夏の快適さは湿度の高低に大に関係するものだと実感しています。夏の快適さがなくなったので、北京生活の魅力も減少してしまいました。

最近の北京の夏は、湿気ばかりでなく、自動車の排気ガスや、クーラーの室外機から出る熱などで、東京と殆ど変わらなくなりました。空気中の二酸化炭素の量などは、北京市政府が厳しく規制して低く抑える努力を重ねていますが、一昔前の東京と同じようで、朝起きるとマンション12階の部屋でも排気ガスの臭いを感じます。そして、朝からギラギラと照りつける太陽とその背景の青い空も見られなくなってしまいました。

本当に、私が初めて出会って、すっかり好きになった北京の夏は何処へ行ってしまったのでしょうか？また戻ってくることは出来るのでしょうか？

虎穴に入らずんば虎子を得ず

私の調べた諺・慣用句 1

三澤 統

「私の調べた 四字熟語」は前回の第50回を以って最終回とさせていただきます。今回から改めて「私の調べた諺・慣用句」として、良く使われる諺や慣用句について、その出自や謂われ等を中国の故事成語から調べて見ることにしました。

第一回は「虎穴に入らずんば虎子を得ず」です。

私達は、ある大きな成功を得るためには危険も辞さない覚悟を自分や周りに促す時に、「虎穴に入らずんば虎子を得ずだ」などと言います。これは誰でも知っている大変馴染みの深い諺ですが、やはり中国の故事にその謂れがあります。

さて、どんな謂れでしょうか。

この成語の出自は〈後漢書¹⁾・班超伝〉の「超曰く、不入虎穴、不得虎子」の部分です。

前漢(紀元前206年～8年)滅亡後の混乱で、それまで漢帝国に服従していた西域のオアシス国家²⁾は、匈奴³⁾の支配下となり、後漢(紀元25年～220年)になると 敦煌 周辺にまで匈奴が侵略するようになりました。後漢朝廷は、ついに西域平定を企図して、軍を起こしました。

これまでに戦功のほまれ高い班超はこれに従軍し、西域国家の1つである鄯善国^{ぜんぜんこく}の説得に赴きます。

班超と彼の36名の随行勇士が鄯善国に到着した当初は、国王は彼らに礼をつくし充分にもてなしてくれました。しかし何日かたつと国王の態度が明らかに大変冷淡になりました。班超は、きっと匈奴の国も使者を鄯善国に派遣してきたので、国王はどちらに服従すべきか分からず、迷っているのだと判断しました。

そこで、鄯善国の王の家臣を密かに呼んでもてなし、国王の態度が冷たくなった事情を聞き出しました。王の家臣はあっさり匈奴の使者200人が来朝し、城外に宿営していることを白状しました。

やはり班超の判断に間違いの無いことが分かりました。班超は36名の勇士を招集して宴会を催し、その席で全員に向かって威儀を正し、こう言いました。

「我々はるばるこの遠方の地までやって来たのである



イラスト 叶霖

から、諸君も立派な手柄を立てたいであろう。しかし、現在匈奴の使者が鄯善国に来て以来、国王は我々に冷淡になってしまった。王の我々に対する態度からして、どうやら匈奴の方に服従する気であるようだ。もしそうなれば我々の身が危ない。このまま手をこまねいても仕方がない。虎穴に入らずんば虎子を得ず、危険を冒さなければ成功は得られないのだ。そこで匈奴の一行に夜襲をかける」

相手は200人、こちらは36人の、多勢に無勢でありましたが、その夜、班超は36人の勇士を引き連れ無勢を隠すため旨く策を凝らして匈奴の使者達を切り捨て、その者たちの首級を国王の前に持って行って見せました。それを見て国王は終に漢朝方に服従することに決心しました。

〈注記〉

1) ^{ごかんじよ}後漢書：中国後漢朝について書かれた歴史書。二十四史の一つ。本紀十巻、列伝八十巻、志三十巻の全百二十巻からなる紀伝体。成立は5世紀南北朝時代の南朝宋の時代で編者は^{はんよう}范曄(398年～446年)。

ウィキペディア (Wikipedia) より

2) ^{おあしすこく}オアシス国家：乾燥地に点在する各オアシスの住人が形成したそれぞれの都市国家。(三澤)

3) ^{こんぬ}匈奴(Xiōngnú)は、紀元前4世紀頃から5世紀にかけて中央ユーラシアに存在した遊牧民族および、それが中核になって興した遊牧国家(紀元前209年～93年)。モンゴル高原を中心とした中央ユーラシア東部に一大勢力を築いた。ウィキペディア (Wikipedia) より

杜子春は、中国の北周～隋(557～581)の時代に実在した人物だといわれています。

彼は富裕な家に生まれ育ちました。志は高かったのですが、自由奔放な性格の持ち主で、成長しても家に落ち着いて家業に精を出すことはなく遊蕩三昧の日々を送っていました。其の結果、父から受け継いだ財産を使い果たし寝食にも困るようになりました。親戚からも、「杜子春は、まともな事をしないやつだ」と軽蔑され、落ちぶれた後は全く顧みられないありさまでした。

ある冬の日の夕方、ぼろぼろの服をまとった杜子春は、一日中、食べ物を口にできないまま、長安¹⁾の街を東から西へとふらふら歩いて城門のところまで来ました。間もなく日が暮れようというのに、食事をさせて貰えるところも、泊めて貰えそうなところもなく、彼は城壁に寄りかかると世の中の無情を恨み、悲嘆にくれるばかりでした。

其の時、杖を手にした老人が彼の前に現れ、「どうしてそんなに嘆いているのか」と話し掛けてくれました。杜子春は自分が置かれている状況を詳しく話し、彼が金持ちだった時はちやほやしてくれていた親戚や友達は、お金が無くなった途端に態度が冷たくなり誰も相手にしてくれなくなってしまったことを伝えました。

杜子春の話聞いた、老人は杜子春に訊ねました。

「お金はどのくらい欲しいのか」

杜子春は、

「今夜、食べて眠る場所を見つけられる程度でもあればどんなに有難いだろう」

と答えました。老人は、

「明日はどうするのだ？ それでは十分ではない筈だ。遠慮せずに言いなさい」

「では、ひと月くらい生活できれば…」

「ひと月はすぐ経ってしまう。もっと必要なはずだ」

「では、何とか三ヶ月くらい生活できれば…」

「いや、それだけではまだまだ足りないだろう。じゃが、今晚はこれだけしか持ち合わせていない。明日の昼頃、西の市のペルシャ人の屋敷に来るがいい。お前が身を立て直すだけのお金を用意してわしはお前を待っていよう」

老人はそう言うのを姿を消しました。

翌日、杜子春は老人が言った通り約束の場所へ行ってみますと、老人は本当にそこで待っており、約束通り真面目に生活すれば身を立て直すに十分過ぎるほどのお金を用意してくれました。杜子春は感激し、感謝の言葉を言おうと思いましたが、その間もなく、名前も名乗らず老人は立ち去ってしまいました。

杜子春は、最初の内こそ一生懸命、真面目に働き、質素に生活していましたが、そのうちだんだんに気が緩み、また昔の気ままで放縦な生活を送るようになって行きました。お金は一生楽に生きてゆけるほどありそうに思えました。良い馬に乗り、豪華な服を羽織り、お酒の飲み仲間を募っては、楽師を呼んで演奏させたり、妓楼を遊び回って、生計を顧みなくなりました。

そうして一年経ち、二年経ちしてゆく内に、老人から貰ったお金はどんどん減って行き、馬を驢馬に、刺繍の服は普通の布の服に変えて行きました。そして結局はまた、二年前と全く同じような有様になってしまいました。

その日の寝食にも困るようになった杜子春は、再び町の城門に寄りかかって天に向かってため息をつきました。と、その時、以前の老人がまた目の前に現れました。

老人は杜子春の手を握って、

「なんということだ。あなたがまたこんなふうになってしまうとはいったいどうしたことなのだね」

と訊ねました。

しかし、杜子春は初めてこの老人に出会った時と比べると変わらない状態になってしまったことを恥ずかしく思うばかりで一言も言葉が出ませんでした。

老人はそんな杜子春を見て、

「大丈夫、責めないから安心して話してごらん」

と更に重ねて訊ねました。

杜子春は恥ずかしく思い、ただひたすら「申し訳ない」というばかりでした。老人は「よろしい。では、わしがもう一度助けてあげよう。では、明日の正午にこの前と同じ場所に来なさい」と言い残して立ち去りました。

杜子春は翌日、恥ずかしく思う気持ちを無理に押し込んで、同じところに向かいました。老人が用意しておいてくれた金額は以前にも増した多額のお金でした。

杜子春は「よし、これからはきつと心を入れ替えて真面目に生きよう！ 商売も一生懸命して、昔の、あの有名な大富豪である石季倫、猗頓よりも大金持ちになってみせよう」と強く自分の心に誓いました。

しかし、お金を手にした杜子春は、自分に強く誓ったことをすっかり忘れ、また、これまでに得た教訓もすっかり忘れてしまい、再び気ままに放縦な生活に戻り、かつてのような贅沢三昧の生活ぶりに戻ってしまいました。

このようにして、再び二年が経過しました。杜子春は初めて老人に出会った時と同様の貧乏人になってしまっていたのでした。そしてまた、以前と同じところで、同じ老人に会い、杜子春は恥ずかしさから、顔を隠して逃げようとしていました。しかし、老人に衣服の裾をつかまれ引き止められてしまいました。

老人は呆れ顔で、

「本当に情けないひとだ」

と言うと、又、懐から以前の何倍かのお金を出して

「これを持って行きなさい。このお金ででたらめな生活を立て直さないと生涯、貧乏から抜け出すことはできないぞ」

と告げました。杜子春は、

「私はどうしようもない人間だ。富裕な家に生まれ何一つ不自由なく育ったが、遊び呆けてばかりだった。お金が全く無くなってしまった時、私は金持ちの親戚や友達から嫌われさげすまれ、誰も救いの手を差し伸べてはくれなかった。そんな私をあなた様だけが三度も助けて下さるとおっしゃる。私はこれから先、あなた様に何を以て恩返しすればいいのでしょうか」

杜子春は深く考えました。そして老人に言いました。

「私はこれまでの生き方から色々なことを学びました。これからはこのお金を使ってこれまで学んだことを心に刻んでしっかり生きましょう。世の中から見捨てられている悲しい寡婦や、孤児の面倒も見ましょう。今度こそ自分の名誉を取り戻すために本心で頑張ろうと思います。それでこそあなた様の深い情けに応えることができるのかもしれない」

老人は

「それこそ私の望むところだ！ 「老君廟」²⁾には二本の檜の木がある。今、わしに言ったことを本当に実行できたら、来年の中元の日とその檜の木の下へわしに会いに来なさい」

と言い、二人は別れました。

当時、淮河以南³⁾の地域は寡婦、孤児、そして貧しい人々が各地から流れ集まるところと知られていました。杜子春もそれを知っていたので、老人と別れると、老人から渡されたお金を持って直ちに楊州に向かいました。楊州に辿り着くと、彼は良い田畑百頃⁴⁾を買い、町中に立派な家を建て、また、売りに出ている家を買って求めたは、寡婦や、孤児を住ませました。姪や、甥などの縁談の面倒を見たり、亡くなった親戚縁者の墓を建てて供養をしたり、かつて恩恵を受けた人に恩返しをしました。一方、自分にむごい仕打ちをした人たちに仕返しをしたりもしました。そして翌年、杜子春は約束の日老人に会いに行きました。

(続く)

注釈

1) 長安：今の西安

2) 老君廟：老君は「太上老君」の略称で、つまり老子のこと。ここでは老子を祭るお寺のこと。

3) 淮南地域：淮河以南の地域。淮河は淮水とも言う。黄河と揚子江の間の大きな河です。河南省、安徽省、江蘇省を流れる。楊州は江蘇にある。

4) 百頃：一頃は約580アール、広さの単位。

【お詫びと訂正】 わんりい 2011年3月号、印刷版の「媛媛講故事-32」のタイトル、干将・莫邪のルビは、'かんしょうばくや'の誤りです。深くお詫び申し上げます。ホームページ版は訂正済みです。 田井

‘わんりい’ 会員の皆様

そして入会をご希望される皆様へ
毎年4月から新年度になります。
おたより会費の納入をよろしくお願ひします。

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本にいらっしゃってる方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行し、情報の交換に努めています。入会はいつでも歓迎しています。

活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。問合せ：042-734-5100 (事務局)

大震災から1週間経ち、この原稿の筆をとりました。今、日本のここそこで、日々の穏やかな暮らしや、人びとの間の温かなやりとり、美しい自然とともにある大地……大切なものに気づき、愛しむたくさんの声が響いています。被災地の方たちが、日本人が、必死で「生き抜くこと」をみんなが励まし続けています。その背景には無数の生と死をめぐる切実な想いがあるのだと感じます。

東京で被災地を映す報道を見ても、ご遺体は数で表されるものの、凄惨なその光景に視聴者が自らの目で触れることはほとんどありません。そんな中、「ガソリン不足でご遺体が見つかって家族に返せない。遺体搬送車を緊急自動車指定にしてガソリンを優先的に回してほしい」という被災地の方の声をニュースで聞きました。「早く火葬してせめてゆっくり眠らせてあげたい。亡くなった方に人間としての最後の尊厳を」と。

こんな映像も見ました。津波でなにもかも押し流された後の見渡す限りの泥地に、一人たたく白髪のご老人。姉・妹さんをこの震災で亡くされたといひます。「うちの軒先に、チューリップの球根を五百個位吊るしてたの。この辺一帯にさーっといっせいにチューリップが咲いたらきれいだなあ、と思っつて」そう言いながら、数日前までご自宅があったその場所を愛しそうに眺めている。死を乗り越えた先に、これから花のように咲くはずのたくさんの命、人も動植物も大地をも含み込んだ、あらゆる生の輝きを身通すかのような、その遠い眼差しに感銘を覚えました。

本来であれば、こんな時に書く文章は励ましの言葉、明るい話題であるべきでしょう。しかし悩んだあげく、今回は敢えて私が中国・陝北で見て考えた身近な死について書くことにしました。それは、震災のただ中にある日本に身をおいてみて、私自身がこれまで陝北農村で日々感じてきた、生と死が隣り合わせにあるという現実が、まさに今、この国で実感されるからです。死を身近に感じることは、生を身近に感じて渴望することに他ならないと、陝北生活で教えられたこと、その時の戸惑いを近頃、鮮明に振り返っている自分があります。久々にかつてのフィールド日記をめぐりつつ、今この時にあって思い出された出来事を、素直に紙に落としてみたいと思います。



白ウサギのお墓とお葬式

2009年8月29日の日記の冒頭。「今日は茅房(家の外にある共用トイレ)に極力行かないよう、夜まで我慢していた。下に昨日まで我が家で鳴いていた黄色いものがチラチラと見えているから」下とは、土を掘っただけのボツ

トン・トイレの穴の下、黄色いものとは同室の子どもたちが飼っていたヒヨコです。

この日の日記はこう続きます。

……動物の死は日常に転がっている。まずは生贄となる家畜。雨乞いの儀礼で殺すのはきまって雄豚。雌豚は女であり、神への捧げものにはならないのだという。先月に見た、県の劇団の公演では、大学に合格した主人公を前に彼女が大喜びで“鶏を絞めよう!”という台詞があったが、今の日本で言えばさしずめ「お赤飯炊こうね!」といったところか。

ペットの死も日常茶飯事だ。今夏のサンワ一村滞在で最初に受けた衝撃は、毎晩一緒に寝ていた猫が産んだ3匹の仔猫たちが、1週間もたたないうちに野良猫に共食いされたという事件だった。その直後、母猫は本当に悲しそう顔で中庭で終始ぼうっとしていた(私自身の落胆がそう見えさせたのか?)。おかみさんも子猫の死に怒り心頭。子猫たちは2匹はまるまる食べられたが、1匹は庭に半分死骸が残されていたという。おかみさんは野良猫が腹いっぱい食べきれないのに3匹目に手を出したことにひどく腹をたてた。彼女は仔猫の亡き骸をシャベルの上に載せて堆肥の山に運び、その中に軽く沈めた。

近所のSおじさんの家で見つかった3日前に生まれたばかりというかわいい10匹の子犬も、数日後には3匹になっていた。もらい手がいないだろう、ということで間引きした、という話だった。

そして昨日、ヤンズ(下宿先の家の女兒、2歳)の白い子うさぎが死んだ。一昨日は胡瓜をやるとポリポリ食べていた。抱くとほんのりと暖かくて、しっかりと生命の感触があった。しかし子供たちが力加減を知らず強く握りしめたからか、とにかく原因不明で突然死んでしまった。昨日、私がマオゴウ(ヤンズの姉、7歳)とアニメを見ていると、ヤンズが「マオゴウ姐姐」と大声で叫びながらヤオトンのドアを叩いた。手をひかれて見に行った時、うさぎはまだ眠っているかのようで、私には生死が判別できなかった。しかしマオゴウの行動は素早かった。小雨が降り始める中、すぐにうさぎの埋葬が始まった。

中庭入口の家庭菜園の一角に木枝で穴を掘りながら、マオゴウは唱え文句のように「可哀そうな白うさぎ」と繰り返す。それをまねてヤンズも何度も口ずさむ。うさぎを穴に入れて土をかぶせると、マオゴウは用意した短冊状の紙の切れ端を穴に埋め始めた。いびつな字で「おやすみ汽車」や「飛行機」などと書かれた短冊は20枚くらいあったらうか。「わたしが白うさぎのために書いたの。うさぎ

が飛行機や宇宙船に乗れるように。「おやすみ汽車」は、うさぎが冥界への汽車の中でぐっすり眠れるように、という意味らしい。「うさぎをここに住まわせてあげるの。誰かが掘り起こしたらペンペン叩いてやるんだ」。墓の上に短冊を数枚重ねては土をかぶせ、水をまわしかけて足踏みをして踏み鳴らす。「ここに埋めたからには、どんなことをしても守らなきゃ。隠られるようにいっぱい土をかけてあげたよ」。

その後、マオゴウはヤオトンの中から、私が唯一自分に戻れる時間＝コーヒータイムに愛用しているプラスチック製の白いスプーンを持ち出した。それを墓の真上から突き刺す。「これを“記号”(しるし)にするんだ。白うさぎは白いから、白いしるし」。これを聞き、下に死んだうさぎが埋まっていると思うと、「スプーン返して」とはとてもじゃないが言う気になれない。マオゴウはそんな私の気持などおかまいなしに、白スプーンのまわりに土をこんもりと盛り上げていく。「白うさぎにミルクをあげる」と飲み終わった牛乳パックに水を入れて墓の上からぐるぐるとまわしかけ、その上からさらに土を盛り、踏み鳴らしてまた“牛乳水”をかける。次に庭の木の葉を山ほどむしりとってきて、墓の白いしるしを葉で囲んでいく。最後に塀から抜きとった2つの煉瓦を、白いしるしを挟み込むように墓の上ののせた。

「出来た！ 私たち出発進行！ イェーイ！」と鼻歌を歌いながら、中庭を行進する子どもたち。うさぎへの哀悼はいらず、墓を作り終えた満足感に酔いしれているかに見える。埋めきれずに放り出された短冊が次々と山の風に飛ばされていく。その後、南瓜の黄色い花、種でいっぱいひまわりの花も供えられた。贈り物はさらに続く。大切にしているブリキのおもちゃ、おばあちゃんがくれた髪飾り…「いちばんの親友だったから。わたしのことを咬まないし、叱ったりしないし、すごく仲良くしてくれた」とマオゴウ。小さなヤンズがたたみかけるように「小宝貝(かわいい赤ちゃん)」と唱え続けた。

一夜明けて今朝、朝食を食べに食堂のヤオトンに行くと、今度は入口脇の椅子の上の箱に見慣れない2匹の

ヒヨコが入っていた。昨晚、隣のヤオトンでやたらとピヨピヨうるさかったのはこいつらか、と思って眺めると、1匹をもう1匹が踏んづけている。「もしかして、こっちは死んでるの？」と尋ねると、「そう、死んだ」。みんなは何事もなかったように、大きな花巻を口にほうばっている。マオゴウが大人たちの会話を遮って突然演説を始めた。「白うさぎは茅房に捨てるわけにいかない」。私は彼らの中の命のランキングを想像して、頭を混乱させた……。

白ウサギのお墓とお葬式

小さなマオゴウとヤンズによるうさぎの墓とお葬式は、この土地の大人たちの葬礼を見事に真似たものでした。風水師が選んだ方角のよい場所(多くの場合、畑の中)に、ドーム状の深い穴を掘ってしっかりと固め、生者が住むヤオトンに似せて作られる土の墓。葬儀1日目には、御遺体の棺が置かれたヤオトンの外に祭壇を設え、遺影のそばに「紙火」と呼ばれる紙製の家や車など、死者が「陰界」(冥界)でより豊かな暮らしができるための品々を、豚肉などの食べ物と合わせて供えます。翌朝、棺は家からお墓まで大行列で運ばれます。埋葬時、風水師は「東西南北には行くな。天にも昇るな。ただ地の下に行け」と死者に向かってきつく命じ、棺を安置した墓穴を分厚い石板の戸によって塞ぎ、陰界との出入り口は断たれます。上から厚く盛り土をして墓は完成。

墓前には「紙火」や参列者が持参した「花圏」と呼ばれる紙製の花輪が並べられ、一気に燃やされます。燃え残りはそのまま放置され、いずれ風がどこかへ運んでいきます。その後のお墓参りでは墓前に花々や食べ物がちぎって供えられ、上から酒を何度も回しかけます。

子どもたちのうさぎのお葬式は“略式”ではありますが、即興でテキパキと儀礼をこなしていく姿に、私は感心させられました。死というものに対する7歳の子どもの対処の仕方は、まさに大人たちのその観察の賜物なのでしょう。

陝北でも老人の葬礼は「白喜事」といい、天寿を全うしたおめでたいこととされます。御遺体には「寿衣」と呼ばれる紅い絹の死装束を着せますが、多くの場合、これらは高齢になった親への孝行として子らが以前から来た日に向けて準備しているものです。経済的に豊かになった近年は、葬儀の夜に花火が打ち上げられ、裕福な家の葬儀はさながら盛大な花火大会のようです。

その一方で、農村では今でも、12歳未満の子供が亡くなると男親が人里離れた山や川に置きに行く、という話をしばしば耳にします。子どもはまだ人間界(「陽界」)にしっかり根づいておらず、いつでも魂を「陰界」に引き戻される可能性がある。そこで、病気がちの子



うさぎのお墓を作るマオゴウ



色々な供え物で飾られたうさぎのお墓



葬儀で死者に供えられた「紙火」(紙製の供物)の家。この「紙火」の家は、ヤオトン式の地階にコンクリ製の2階部分をもった最新式の豪邸。自家用車やバイクも停まっている。

供には銀の鍵を首からぶら下げて命に鍵をかけたり、背中から大蒜をぶらさげて悪い「鬼」(霊)を追い払ったりと親たちは苦心するのです。子どもの健やかな成長を願う剪纸も刺繍も、そんな日常にありふれた「子どもの死」と表裏の関係にあります。また12歳を過ぎた青年が未婚のまま亡くなると、同時期に亡くなった同年代の娘を探して墓を隣に作る「冥婚」が行われます。こうして伴侶を得ることで「人」になったとみなされ、その一族の子孫繁栄が保証されると言います。「大人」になって生き抜くとはなんと大変なことでしょう！

冬寒くなると街では自然とお葬式も増え、毎晩のように空に花火が上がり、どこからともなく賑やかでちょっとセンチメンタルな節の笛の音が響きわたります。そんな冬の花火を見るにつけ、激動の時代をくぐり抜けて天寿を全うしたであろう、日焼けした深いしわが刻まれた陝北のお年寄りの顔を思い浮かべ、心からの敬意を払わずにはられません。

過疎が進む陝北の農村には、老人ばかりという村が多く存在します。1999年以降、黄土高原の環境保全のため果樹栽培が半ば義務づけられてからは、収穫期のみ街から帰省する家が多くなり、中には数十戸からなる村に、住んでいるのは老夫婦ひと組だけというケースもあります。ご老体に鞭打って山道を牛を引き引き水汲みに通う姿を見て、「なぜ、街の子どもと一緒に住まないの？」と尋ねると、きまって同じ答えが返ってきます。「ここに埋められたいから」それはこの土地に土葬して欲しい、という切なる願いを意味します。延安などの都会で死ぬと火葬を余儀なくされるため、どうしても村を離れたくないというのです。

農村の深い谷の山肌には、草木が生い茂り、人が入り込めない場所に古い世代のお墓が並んでいます。どこに墓があるかも既にあやふやです。子孫たちは親や祖父母の墓参りの後に、そんな古いお墓の近くまで行き、大地に跪いて供物と酒を振り撒き、紙銭を燃やして爆竹を鳴らした

から叫びます。「大勢の御先祖さま～、またちゃんと来ましたよー！」そんな光景に出会うたびに、とっくに黄土の山に同化しているだろう古き御先祖様たちが、山々にこだまする爆竹の音に苦笑している姿が想像され、ほほえましく思われます。

✂ 魯迅の墓

最後に「偉大な死」に触れて筆をおきます。先日まで魯迅の箴言集を作っていた関係で、魯迅をめぐる日中の作家や親交のあった人々の文章に多く触れる機会を得ました。中でも作家・堀田善衛が書いた「魯迅の墓」という文章は印象的でした。1945年、上海にいた堀田が見に行った万国公園の魯迅の墓は、白い墓石が立っているだけのつつましやかな土葬の墓で、草もぼうぼう。「『葬』という字は草の間に死をほうり出すということだと聞いたことがあったが、それはまさにそのようであった」と堀田は回想しています。解放後、魯迅の墓は現在魯迅公園となっている場所に移され、巨大な魯迅像や毛沢東の筆による墓碑が設置されました。堀田は「それはいわば魯迅個人の墓ではなくて、死んだ魯迅が中国人民の歴史と意志のなかにうつしおかれたということの意味する。それはそれでいい」と言いつつも、そんな栄光は「私はごめんを蒙ります」と書いています。

日本と中国の狭間にあって自らの意思を貫き、常に自らと大切な人たちの生と死に向き合いながら生き抜いた魯迅。彼自身は家族への遺言として、自分の死後「いかなる記念に関することもしてはならない」「私のことは忘れて、自分の暮らしを大事にすること」と記しているのですから、死んでから中国革命の聖人に祭り上げられたこの故人は自らの墓をどう見ているだろうか、と問わずにはられません。

動物、植物、そして人間。それら生き物の一つの命が途絶えた時、後に生きる者はその死とどう向き合い、どう扱うのか。正解などどこにもないけれど、日常から死を隠さず、死、そして死者を身近に感じながら暮らすことで、生もまた違った意味を帯びるのではないか。少なくとも、陝北の山々に散在するお墓や死者たちは、生と死の繰り返しを育み続ける大地を、健やかなるままに次世代に引き継いでいくことの大切さを語りかけているように思われなりません。

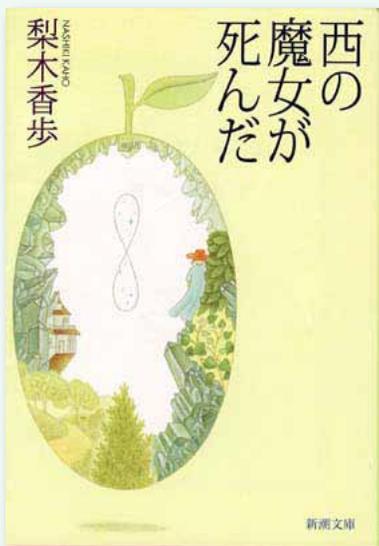
✧ 丹羽朋子 (にわともこ)

東京大学大学院文化人類学研究室、博士課程在籍中。中国陝北の民間芸術研究の傍ら、日中の出版界をつなぐプロジェクト「一芯社図書工作室」のメンバーとして活動中。一芯社ウェブサイト (<http://yixinshe-books.jimdo.com/>) に掲載中。

3月11日の地震の日から、2日半は「寝る」と「食べる」ことしかしなかった。寝ている間に、チェーンメールが携帯電話に続々届く。出勤自粛した月曜日の夕方によく起き、夕食の買い物にでかけたら、店の棚は空っぽ。「流行」に疎い私は、しばしばやりしてしまった。

そんな折に、飛び込んできたこんな台詞。「いちばん大事なことは自分で見ようしたり、聞こうとする意志の力ですよ。」学校に馴染めない13歳の少女が、社会を生きていくために、祖母から知恵を授かるシーンだ。少女が「魔女」と信じる祖母は、ささやかな自給自足の生活を送っている。そのため、「魔女修行」は必要ないと言い切る。でも、少女は、「戦闘体制」である社会で生きていかななくてはならない。だから「魔女修行」が必要なのだ。

「魔女修行」にいちばん大切なのは、「自分で決める力、自分で決めたことをやり遂げる力」。でも、魔女はとても柔軟だ。「自分が楽に生きられる場所を求めたか



らとって、後ろめたく思う必要はありませんよ。(中略)シロクマがハワイより北極で生きるほうを選んだからとって、だれがシロクマを責めますか」と。自分で決めたことであれば、その選択は肯定される。

ちなみに具体的な「魔女修行」とは、「早寝早起き。食事をしっかりと、よく運動し、規則正しい生活」をすること。シンプルかつ困難なこの修行は、確か作家・村上春樹さんが実践していたような。冒頭の私のように、「修行」を放棄したものには、意志の力は動かない。結果、空っぽの店棚の前に、呆然とする始末。きっと、買いだめに走った人たちも、しばらく「修行」を放棄していたに違いない。今、私たちには、特に「魔女修行」が必要だ。しっかりとした日常生活を築いて、落ち着いて判断することが。その

判断の先に、自分たちができることがあるはず。

…などと翌日、気持ち新たに会社した私だが、計画停電に振り回され、まったく仕事にならなかった。「魔女修行」は、本当に難しい。
(真中智子)

松本杏花さんの俳句

qiān lǐ tóng fēng
「千里同風」より

菜花の香ああこの香よと風に佇つ

菜花吐芬芳

深嗅殷殷此种香

风思故乡

季语 菜花，春。

赏析 这首诗作表现出了作者浓烈的乡愁情思情绪。菜花一般是以其夺目的黄色给人视觉冲击的，但作者却以嗅觉触类旁通，产生了怀念故乡的情愫。那口语中的惊叫，将作者对往昔的眷恋和盘托出，犹如山洪暴发，一泻千里。于是，她伫立在风口贪婪地吸纳如同以往菜花一样的香味，浮想联翩，遐思绵绵不尽……

花の散る幽明の風運び来て

碧空舞落英

忽而黯然忽而明

只缘无常风

季语 花。春。日本人所说的花，特指樱花。如“观花”，即赏樱。

赏析 坠粉飘红，似雪纷飞。人生无常，如痴如梦。那落英的飘渺，仿佛今生来世，转换轮转……



今回の災害で被害に遭われた皆様を、心から応援しています

幸せそうな顔や風景を見ると、心が豊かになりますね。

不幸に見舞われ避難生活をされている方たちも、食糧燃料などの実用的な支援物資と同時に、音楽や芸術などに触れることも大きな支えになるのではないかと思います。自らの抱えている痛みにも耐えながらもコミュニティー全体の和を大切にしている被災者のみなさんを心から敬服しています。

負った傷が、時間や季節のやさしい巡りの中で癒されますように。

今回の災害が恐ろしい記憶にとどまることなく、混沌から創造へとむかう素晴らしいモデルケースとなりますように。

農耕民族である私達の、仲間力の見せどころです。



「風揚げ」 邱建国 (金山農民画院)



「雪だるまづくり」 姚喜平 (金山農民画院)



「すいか番」 朱素珍 (金山農民画院)



「年越し」 邱建国 (金山農民画院)

今回はゴール、正確には「ゴール旧市街地と砦」を紹介いたします。これまで紹介してきたアヌーラダプラ、ポロンナルワ、ダンブーラ、キャンディの4件は仏教遺跡でしたが、ゴールでは仏教色は薄れアラブとヨーロッパの色合いが濃い世界遺産です。

まずはゴールの町を簡単に紹介しましょう。ゴールはコロンボから南へ約110km、鉄道で約3時間30分、バスで約4時間の場所にあるスリランカ南部最大の都市です。たったの110kmなのに随分と時間が掛かると思われるでしょうが、スリランカでは標準的な時間でしょう。僕自身は全く自慢にもなりません、早朝の空いている時間に自分で運転して1時間40分で走った経験があります。ゴールの町は半島部分にある旧市街地と、半島の付け根から内陸に広がる新市街地に分かれています。

鉄道やバスのターミナル、商店街等は新市街地にあります。世界遺産に登録されているのは半島全体を囲うように建造された城壁のある砦と、その内側にある旧市街です。旧市街地では新しい建物を建設するには厳しい制約があるので、殆どが植民地時代の建物です。

14世紀以前は小さな漁港だったゴールは、14世紀にはスパイス・宝石等をもとめて進出してきたアラブ商人によって貿易港として発展しました。そのせいか、今でも宝石商人にはアラブ系の人が多いようで、コロンボのホテル内で宝石店を営む友人の名前もハッサンさんでした。16世紀に入ると、ヨーロッパ勢がスパイス等を求めて進出します。1589年にはポルトガルによって最初の砦が半島先端に築かれました。1640年にポルトガルに変わってオランダが砦を支配し、城壁を拡張すると共に内側に市街地を建造しました。更に18世紀に入るとイギリスがオランダを追い出して、砦を支配するようになります。前回に紹介したキャンディ王朝の滅亡と同じ過程ですね。

2004年12月26日のスマトラ沖大地震によって生じた津波によってスリランカも大きな被害を受けました。ゴールも例外ではなく、テレビで何度も放映されたバスターミナルでバスや人が流されていく光景は、まさにゴールのバスターミナルのものでした。

バスターミナルは新旧市街地の境にある広場に隣接し、広場では津波が到来したのが日曜日の朝8:30ごろであった為に、恒例の朝市が行われていた事が被害を大きなものにしました。3月11日の東北関東大震災で生じた津波で町が流されていく光景を見る度に、当時の光景が思い出され、どんなに備えても自然には勝てないものかと改めて感じます。ゴールでは新市街地は壊滅的な被害を受けましたが、約470年前に建造された城壁

に守られた旧市街地は若干の浸水があっただけで、人的な被害はありませんでした。城壁の高さは場所によってそれぞれ違いますが、インド洋に突き出した最先端では15m以上はあったと記憶しています。

城壁は歩いてほぼ一周する事が出来ます。途中にスリランカ軍のキャンプがあるので、この部分は通行禁止なので一端市街地に迂回しなくてはなりません。キャンプの向こう側で再び城壁に戻る事が出来ます。ユックリ歩いても1時間程度でしょうか。城壁の途中にある銃眼や砲座跡からインド洋をながめると、はるか昔の大航海時代を想像する事が出来ます。もっとも、現在では航行しているのは帆船ではなくて、コンテナ船やオイルタンカーばかりですがね。

さて次は城壁の中に入ってみましょう。城壁には2ヶ所の門があります。1箇所はバスターミナルの正面にある門で現在はこちらがメインゲートとされています。せっかくゴールまで来たのですから、メインゲートの前で左折して暫らく歩いてオールドゲートを通って中に入りましょう。

このゲートの上部にはオランダ時代に活躍した東インド会社のシンボルマークであるVOCのエンブレムが冠されています。僕には読めませんでしたが、このエンブレムには1683年を示すオランダ語も刻まれているので、約330年前のものである事が判ります。オールドゲートをくぐって中に入ると狭い道路が交差し、ポルトガル、オランダ、イギリスの各時代に建てられた教会や住居や事務所、アラブ時代のモスク、東インド会社の倉庫や事務所をそのまま使ったホテルやギャラリーなど新旧の建物が密集しています。

城壁内で一番高い丘の上にはゴール国立博物館と1863年にスリランカで最初の西洋式ホテルとして開業したニューオリエンタルホテルがあります。ニューオリエンタルは最近になって外国の高級ホテルチェーンに買収されて、外観は変わりありませんが、内装が変わって植民地時代の雰囲気はなくなりました。

旧市街地は城壁に囲まれた狭い場所なので、ガイドブックはバッグに仕舞って、行き当たりバッタリに歩き回りましょう。どこの土地でも同じなのですがお腹が空いたり、喉が渇いたら地元の方で賑わっている店に入って、手振りで食べたいものを注文してみましょう。言葉は通じなくても、何とかなるものです。道に迷っても、城壁を見上げれば何処かに時計台が見えます。時計台の下がメインゲートなので、安心して迷い続けて下さい。最後に時計台方向に歩けば外に出られます。

●次回はシンハラージャ森林保護区を紹介します。

為我井 輝忠(前福州外語外貿学院日本語專家)

前回中国で使われている英語と中国人の英語力について書きましたが、今回は中国各地で見かけた日本語の表示について述べてみたいと思います。

英語と比べて、街中で見られる日本語表示は、特に北京、上海、大連のような大都市で多く見られるようですが、時に、とんでもない僻地でも見かけることがあります。とは言え、英語は当たり前はどこでも見かけますが、やはり日本語での表示は英語での表示に比べるとまだそれほど多くありません。そんな中、気が付いたことは、各地で目にしたのは正しい日本語での表現は少なく、かなりおかしな表現が多いということです。

まず、いくつか例を挙げてみましょう。

【写真1】 商店の看板に「優の良品」という看板が出ています。これは最近中国各地でよく見かけます。香港でも目にします。売っているものは、菓子類で、特別日本のものを扱っているというわけではありません。意味はなんとなく分かるのですが、注意してほしいのは「～の～」という表現で、中国語の「的」に相当する言い回しです。

例えば、「日本的東西」といえば、「的」は日本語の「の」に相当し、「東西(dōngxī)」は、「品物」とか「もの」というような意味で軽く使います(方向を表す時は「東西:dōngxī」)から、「日本の品物」というような意味ですね。「の」という日本語の表現を一般の中国人が理解しているとは思えませんが、中国語にちょっと日本語を加えてハ

イカラな感じや高級感を出すために使っているのだと言えるでしょう。中国人に聞くと、このような形で外来語を使うのは大変人気があるそうです。特に、「の」を使うのが流行っているようです。日本でもいろいろな宣伝文句やコマーシャルで英語をはさんで使うのと同じ感覚です。意味は分からなくてもなんとなく「かっこいい」ということなんですか。

次に写真2と3をご覧ください。両方とも私が勤めていた大学の構内で見かけた日本語です。

【写真2】 9月の新入生入学時に上級生がクラブ活動への入会を勧める日語協会の看板です。「新会を募集する」は変ですね。「新入会員を募集する」か「新入会員募集」とでもすべきです。もうひとつ気が付いたのは、下の方に「今から、楽しくて日本語を勉強しましょう」と出ていますが、これも変です。「楽しくて」は「楽しく」です。この程度の間違いは愛嬌と言ってもよいでしょう。

【写真3】 この写真は、構内のいろ

いろな場所で見かけたキャンペーンの一つです。

「みな本科に進級するために貢献をして、みな学院のために彩りを増す」

と書かれています。日本語としてはかなりおかしいですが、意味はなんとなく分かるような気がします。でも、本来の意味は少々違うようです。同じ場所に、中国語、英語、フランス語も書かれていて、意味はどれも同じです。

中国語と英語をよく見比べて分かったことは、「諸君は改善計画に参加し、我が学園に輝きを加えるべく貢献すべきである」

というような意味だと思います。ちょうどこの時期大



【写真1】



【写真2】



【写真3】

学は移転計画があり、そのために様々なプロジェクトが行われていました。

もう一つ見てみましょうか。

【写真4】 あるスーパーで見かけたスナック菓子らしきものですが、包装紙に書かれた日本語に注目してください。「納豆こんにやくビスケツイ」と書かれています。一体これは何なんでしょうね。納豆+こんにやく+ビスケツイ？「ビスケツイ」は「ビスケット」のことですね。包装紙にこんな文字も書かれています。

「よりすぐった大豆を炭火を使って育てました。カップの底にディンプルを施し、さらにおいーくなった納豆です」

書かれてある文章の意味が分かりますか。ただ言葉を羅列しただけという気がしますね。これはもちろん中国国内で作られた製品です。誰がこんな日本語を考え出し



たのか大変興味があります。

今回はこれで終わりたいと思いますが、まだまだ紹介したい奇妙な日本語の例がたくさんあります。次回をご期待ください。

黄土高原やぶにらみの旅 6

有為楠君代

◆ 黄土高原で感じたこと

小高い丘の上にある孫家河村から再び緑の中を下っていく間、不思議な充足感を感じた。一年で一番暑い8月ではあるが、夕方だということもあるのかも知れない。或いはまた、黄土高原といっても大分南に来て、標高も低くなり、中原に近づいているからかも知れない。いずれにしても、私が今までに見て来た写真などから想像遅しく思い描いた黄土高原とはちょっと違うようだ。

前にも書いたが、私は黄土高原というと、冬の草木の無い大地に薄っすらと積もった雪が地形の変化に応じて、様々な模様を見せてくれている写真しか見たことが無いので、夏の黄土高原を想像するのは難しかった。それでも、夏だから草木が一本も無いということは無いだろう、きっと、冬の写真で見える雪の代わりに草が生えているだろうとは想像出来ても、そこにあるごつごつとした荒々しい大地が、人々の営みを冷やかに見ているのだろうと思っていた。

しかし、昨日まで案内して頂いた延川あたりの、黄土高原真っ只中と言う土地でも、土地の荒々しさは感じなかった。強烈な日差しは想像通りだったし、高原の畑の作物は氣息奄々としているようだったけれど、人々の耕作の努力に充分応えてくれているようだった。表面から一段下りたヤオトンの周りには、人々に寄り添い、木陰や果実を提供してくれる木々もあって、そこに住む人々が、自然の中で充実した生活を営んでおられるのが見て取れて、都会であくせくと動き回るしか能の無い身にはとても羨ましかった。

この地の弱点は水である。人々は水を得るために、他の

土地では考えられないような労力を費やさなければならなかったようだ。旅の始め頃、黄河(か、その支流か)の対岸を見渡せる所で、周路さんが指差した先には、河岸段丘をジグザグに刻んだ模様があった。それは人々が何百年も黄河の水を丘の上に運び上げるために往来した道で、その道のりの厳しさは、遠い対岸からも充分に感じられるものだった。この道、今ではポンプが普及して使われなくなったとのことだったが、年月を経た踏み跡はこれからも長く、人々の往時の苦勞を後世に伝えてくれることだろう。

◆ 豊かな街 甘泉

そんな延川周辺から、3時間ほど南へ下った、ここ甘泉は標高も大分低いようで、孫家河村は、延川付近よりもっと緑が濃く、豊かな雰囲気漂っている。緑の中に続く丘の道は、ちょっとしたハイキング気分、立ち止まるとは深呼吸をして周りの緑で目を楽しませた。勿論、ここに住む方々にとってはそんな気楽なものではないのだろう。家の周りには畑が見当たらないので、きっと上のほうまで耕作に出かけなければならないのだろうとは容易に想像がつく。しかし、庭に設けられた、枯れ木を組み合わせで作った大きなバケツのようなトウモロコシの貯蔵所は、1,2 ヶ月後の収穫を待ち構えていて、日々の苦勞が結実して積み上げる喜びを人々に約束しているようだった。

地名の由来を調べたわけではないが、甘泉というからは、昔から豊かな水が湧き出ることが知られ、その水に人々が集まって集落が出来たのだろうと容易に推測できる。多分この辺りは、延川近郊より一段と豊かな土地だろうと勝手に想像した。

甘泉だけではなく延川付近でも、感じたことだが、以前

私が黄土高原に対して抱いていた「荒々しい大地」と言う印象はまったく的外れであったようだ。今、5日間程だが黄土高原を旅してみて、黄土高原に「母なる大地」を感じている。中国の歴史でこの地の攻防が国の興亡に直接係ったことが何度もあることを聞いて、不思議に思ったものだが、それは黄土高原の地力を知らなかったからなのだと気がついた。聞く所に依ると、黄土高原が今の様な姿になったのは5世紀を過ぎた頃(異論があるのは承知)からで、それまでは緑豊かな森林が広がっていたと言う。この話を聞いた時、すぐには信じられなかったが、今回の旅で、「そうだったのかも」と思えるようになった。

よそ者には荒々しさを示す黄土高原も、そこに住む人々には内に秘めた優しさを分かち与え、その生活を支えているようだ。人々は「母なる大地」の懐で、夏に与えられるものを収穫し、冬は昔から伝承される文化を育みながら、綿綿と続く中国の歴史の中で生を繋いで来たのだろう。時間を背負い、大地に足をつけて広がる生活に根ざす文化は、それだけで充分我々の心を打ち、存在感を発揮するものだ。

◆ 甘泉の夜

車を降りて登った同じ道を下りながら、思わず今回の旅を総括してしまったが、旅はまだ続いていて、我々は再び車に乗り、甘泉の市街地へ戻って行った。東京で言えば、開発前の多摩丘陵に入り、新宿辺りまで戻って来るような距離感で、甘泉賓館に帰り着いた。

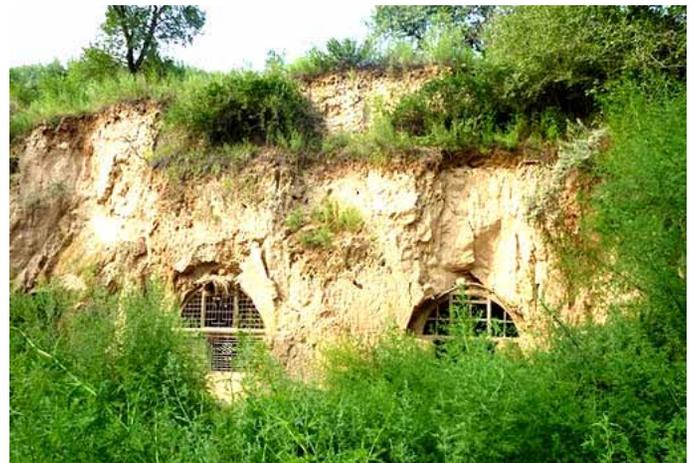
一旦部屋に入って一休みした後、歩いてレストランへ出かけた。街並みが北京とは違うけれど、丁度、小区の中へ入って行くような感じで路地を抜けると、平行して走る次の道へ出たようで、ホテルから3,4分のところで、なかなか落ち着いた雰囲気のお店だった。中に入ると、右手にちょっと広い個室があり、中国ではめずらしく厚手の木で作られたテーブルと椅子が配置されていた。壁には書と水墨画の大きな額が掛かっていた。その作者は、今日一日壺口へ同行して下さった、周路さんの友人4人の中のお一人、上官さんだとのこと。聞けば、このお店は、その上官さんの奥さんが経営しておられるのだそうだ。

取り立てて日本らしい品物があるわけではないのに、何となく日本らしさを感じるのが不思議だったが、上官さんに話を聞くと、日本に行ったことはないが、日本の文化に興味を持っているとのことと納得した。それにしても、「上官」という名前はめずらしい。中国では二文字の姓は少ないと聞いているが、その中でも珍しいそうだ。

出てきた料理は皆美味しかったが、特別印象に残るようなものは無かった。言い換えれば、いかにも中国らしい料理だったのだ。今晚は黄土高原で最後の夜なので、何時にも増して酒盃のやり取りが激しく、あまり飲めない我々も思いがけず酒量が進んだ気がする。今回周路さんの頼みを聞いて、見ず知らずの日本人の旅行のために時間を割いて下さった4人の方々は、皆芸術家で気持の良い人達



甘泉の丘



ヤオトンの廃墟 (甘泉)

だった。この辺り、特に甘泉は周路さんもあまり詳しくはないようで、壺口での駐車場利用や山西省での昼食など、いろいろアドバイスがあったようだ。車2台に分乗したので、直接お話をする機会が少なかったけれど、あれこれ気を使って下さって、我々の旅を快適にしてくださった。

特に壺口瀑布からの帰途、革命記念碑の前でスイカを買い、テーブルを用意して待っていて下さったのには感激した。随分長い間待っていて下さったに違いないのだ。何と言っても、彼らの乗る車は速い。道路は広くて真っ直ぐ、信号機も少ないし、空いているので余り速さを感じない。我々の運転手楊さんもスピードは出すが、時速110キロ位までの安全運転なので安心して乗っていられた。それに引き換え、4人組の車は猛烈なスピードで走っていた。我々の車に後から追いついたと思ったのに、あっという間に追い越して、真っ直ぐに続く道を走って行ったが、こちらがちょっと目を離した隙に、前方の車の姿は消えてしまっていた。多分、150～160キロは出していたのではないかと思えるスピードだった。その計算で行くと、我々の到着まで30分以上は待っていて下さったのではないかと思うのだが、そんなことをさりげなくやったださる方々だった。

われわれの中国語では肝胆相照らすとはいかなかったけれど、われわれの感謝の気持は感じていただけたのではないかと思える楽しい夕食だった。いよいよ明日は、1週間お世話になった周路さんともお別れして、甘泉から西安行きの長距離バスに乗るので、名残は尽きないけれど、宴会も程々に切り上げて宿に戻った。

◆ 西安へバスの旅

翌朝は6時にチェックアウトして、恒例になった道端の食堂ともいえぬ食堂で朝食をとり、ちょっと早めだったがバス停に行った。4人の方々もバス停まで一緒に来てくださった。バス停には既にバスが停まっていて、人が大勢乗っていた。予約をして席を確保してくださっていると聞いていたのに、行ってみると、殆ど満員状態で、我々の席はないようだった。あったとしてもあちこちに分散して座らなければならないようだったのでちょっと慌ててしまった。

しかし、周路さんを含めた中国の人たちは慌てず、バスに乗れとは言わずに外でまっていた。暫くすると、バスの運転手さんが来たので話をすると、運転手さんがバスに乗り込んで、前の方の席に座っていた4人を移動させて、我々の席を作ってくれた。それから我々は荷物を預けて、空けてもらった前の方の良い席に腰をおろした。バスは7時50分出発と聞いていたのに、7時半には出発してしまっ

た。歩道には周路さん、運転手の楊さんと当地の芸術家4人の皆さんが並んで手を振ってくれていたもので、暫くは名残を惜しみながら甘泉に別れを告げたのだったが、ちょっと落ち着いてから、この席に座っていて、明け渡しを迫られた人たちはどうしただろうかと気になってきた。バスの中にいるのだろうが、どの人だったかは分からない。若し一番にきて良い席に座ったのに、出発間際になって移動するように言われたのだとしたら気の毒だと考えたが、ここで、一昨年、山西省で経験したことを思い出した。

一昨年、山西省で、春節に旅行して、村々のパレードを見学する機会があった。旅行社の計らいで、村のお偉方がパレードを見物する、言わば観閲台の最後列に我々一行のために席を用意していただいた。村人が立って見物しているのに、一段高い所にテーブルと椅子が用意されていて、

ちょっと晴れがましい気分になったものだが、予定時間になってもパレードは始まらず、一行の何人かが連れ立ってトイレに行くことになった。同じ列に残っている人達がいるので、すぐ戻るからと眼鏡を置いて席を外したが、トイレが思いのほか遠くて時間がかかり、戻ってみると、我々が座っていた席には回りの村人が座っていた。我々がもどったのを見てすぐ席を立てくれたので、再び座ることは出来たが、眼鏡は行方不明になってしまった。

その時、別の人たちに用意された席でも、空いていれば座ってしまうという中国の考え方に不思議な感じを持ったが、今回のバスの件で、もしかしたら予約席だとの表示があったのに、我々がなかなか現れないので座ったのかも知れないと思い至った。と同時に、表示は何も無いのに、ただ予約席だからどけといわれた、と言う可能性も捨てきれない。私の余り多くはない経験でも、中国ではどちらもありうるのだと言えよう。

それともう一つ、バスの出発時間は、今回満員になったので予定の時間を早めて出発してしまっただが、若しまだ満員になっていなければ、出発時間を延ばして待ったかも知れない。真偽のほどは分からないが、路線によっては、バスの運転手さんは乗客の人数によって稼ぎ高がかわってくるので、成るべく満員のバスを運転したがるのだ、と聞いたことがある。そしてその話を納得させるような事例を何度か目にしている。

何はともあれ、バスは一路西安へ向けてはしりだした。1週間前に、この同じ道を北上して延安へ行ったはずなのに、まるで覚えていない。あの時は、予定外のバスで、延安にちゃんと着けるかどうか不安がいっぱいで、景色どころではなかったのだ。今回は予定の行動で、気持ちにも少しゆとりが出来たので、ゆっくりと、目の前に広がる景色を楽しむことができた。確かに黄土高原は終わって、一路平原に下る道だと納得するなだらかな丘陵の道が続いていた。西安での珍道中は、筆者が変わってご報告する予定である。

漢詩の美しい音声とリズムで漢詩を楽しむ 京劇俳優・殷秋瑞さんと読む・漢詩の会 そのⅢ

日本でよく知られている、五言絶句の短い漢詩を、

1節ずつ、繰り返し正しい発音で練習して音楽感覚で詠えるようにしましょう！

中国語を学んでいらない方も、是非！詩吟のように漢詩の音とリズムを楽しめます

* 4月30日までにお申込みの方には資料を前もってお送りします。

場所：まちだ中央公民館7F・音楽室Ⅱ

〒194-0013 原町田6-8-1・町田109/7 F JR横浜線町田駅・ルミネ口徒歩3分/小田急線町田駅南口徒歩5分

2011年5月8日(日) 10:30～12:00

参加会費：1500円 定員：15名

お申込み&問合せ：☎050-1531-8622(有為楠)

E-mail:ukiuki65jpp@yahoo.co.jp



殷秋瑞(いんしゅうずい)

中国戯曲大学卒業。顔全面に濃厚な隈取を施す豪傑役俳優。中国戯劇家協会会員/中国演出家協会会員/桜美林大学/多摩美術大学客員講師。

得意演目:「三国志」の曹操、張飛/「水滸伝」の魯智深/「霸王別姫」の霸王など。

又、NHKラジオの初級中国語講座やテレビの中国語講座でゲスト出演で多くの方に親しまれている。

次に「花と緑」について書こう。大連といえばアカシアの花が有名である。毎年5月下旬に市内各所でアカシア祭りが開かれる。白い花とうす紅色の二種類を見るが、その時期に公園や街路を歩くと甘い匂いがほのかにただよって来て、とてもいいものである。アカシアといえば清岡卓行の「アカシアの大連」を思い出す。この小説は昭和44年に芥川賞を受賞しているが、今でも書店で文庫本で売っているので一読をおすすめする。

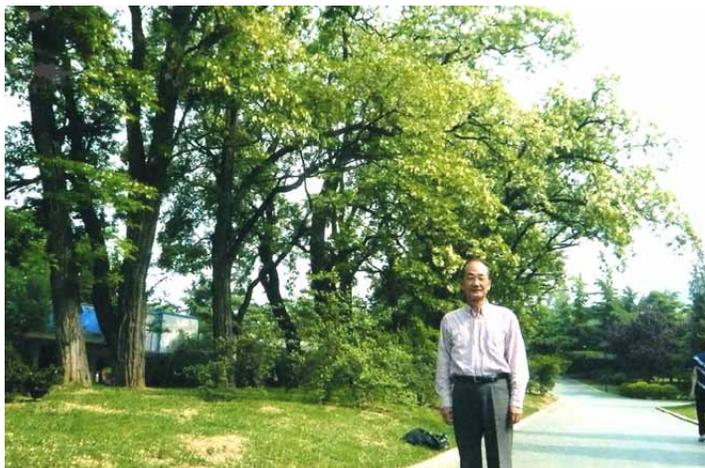
又、これは中国各地で見られるものであるが、柳の種子であり中国の風物詩の「柳絮(りゅうじょ)」を紹介しよう。樹木の形は日本の柳と全く変わらないが、中国の柳は春になると木々に白い綿毛につつまれた種子をつけるのである。風に吹かれると空中を舞い、目や口にも入ってくる。ボタン雪がいっぱいふりかかってくる感じである。中国に行けばこの時期に見られるのは知っていたが、初めてみた時はオーバーかも知れないが感動した。これが漢詩にも詠われる「柳絮」かと。中国人は毎年見ている上に、目や口にも入ってくるのでうとうとしらしいが、私は毎年でもこれを見てみたい。2008年の手帳をみると5月8日に柳絮が飛びはじめたとあった。

大連の春は迎春花(げいしゅんか)というレンギョウの一種と思われる黄色い小さな花が咲く時から始まる。3月中旬ころから咲きはじめるが、通勤途上に咲き乱れるこの花を見るのがとても楽しみであった。「迎春花」は正式の花の名前かどうかよくわからないが、いい名前をつけたものである。

現場での労働は重いものを運んだり溶接の火花が飛び交う中での重労働であり一日中本当に大変である。少しでも従業員の心がやすまればと会社の小さな花壇に枝ぶりのいい柿の木を植え周りに山里紅という花の咲く木の苗をいくつか植えた。勿論迎春花も買ってきて会社の入口付近に植えた。これらは今春も咲いてくれたであろうか。いつか是非みてみたい。

桜については、名所といわれる所もあるが小規模で日本のそれとは比べものにならない。やはり桜は日本が世界一である。

大連市民の自慢はいくつかあるが、海のそばにある星海広場はすばらしい。中国々内では北京の天安門広場とこの星海広場が二大広場だと中国人の友人が言っていたがその通りと思う。上空から見ると大きな楕円形をしている。広大でかつ美しく端から端まで歩くと



運動公園(大連市内)のアカシア並木

かなりかかる。ここでいろいろな行事が行われる。

8月に2週間近く開催される「ビール祭り」は市民が待ち望んでいるお祭りである。世界各国のビール会社がコーナーを設け、その中にステージをつくり音楽の演奏などもし、それぞれが趣向を凝らして面白い。入場券を買って入るがアルコールに弱い私は雰囲気だけで酔ったような気持だった。連日ものすごい人出で熱気に包まれ、さすがの広大な広場もせまく思えるほどだった。広場の中央には古代宮殿や陵墓の前に立てたという大きな真白い石柱が空を突きあげるように立っている。これは華表(ファービャオという)といい、柱のまわりには竜などの彫刻がほどこされ、中国らしさを醸し出している。友人の話ではこの高さは1997年の香港返還を記念して19.97mあるとのこと。何でも北京にある一番高い華表より高いというので中央政府からいちゃもんがついたというが真偽のほどはさだかではない。

もう一つ書いておきたいことがある。大連には、というより東北三省には山東省出身だという人が多いのである。「中国全省を読む」(莫邦富著)という本には次のように書かれている。——山東省は昔から豊かな省のイメージがあまりなかった。農民は貧しく干ばつ・水害が多い故郷を離れ、東北と呼ばれる黒龍江省・吉林省・遼寧省に移住して新天地を求めるといふ伝統がある。この国内移民現象は、国民の移住を厳しく制限した文化大革命時代でも中断したことがなく、改革・開放がすすみ、生活水準の向上がみられるようになった1980年代までつづいた。——とある。

大連日通にも「親の代にとか、おじいちゃんの代に大連に移住した」という人が多い。彼らはルーツの山東省を誇りにしている。山東省には中国一のもの、い

や世界一とも言えるものが三つあるというのである。何かと聞くと「一山一川一聖人」という。一山とは泰山でご存知の方が多と思うが中国一の山である。一川とは黄河である。一聖人は孔子である。なるほどとその時思った。孔子は文化大革命のとき否定されたが、やはり世界の偉人であり見直されている。どこの国の人も自分の生まれた国、自分の故郷は大切にし、誇りをもつものである。日本は残念ながら一部の人は、国旗や国歌に対し否定的な考えをもっているが、なぜもっと素直な心で誇りに思わないのであろうかと思う。

まだまだ大連市について書きたいことは山ほどあるが、そろそろまとめに入りたい。これまで書いたように、

5千年（私が4千年くらいではないかと言うと、中国人の多くは5千年だと言う）の歴史という中国にあって大連はたかだか100有余年の歴史しかないが、とにかく魅力ある都市である。100年前の大連と現代の大連がミックスされながらさらに未来に向かって前進している。大連にいる中国人が「この街は空気と水と緑がとてもよい。黒龍江省や吉林省とくらべるとあまり寒くなく生活しやすい」という。大連市は中国人が一度は住んでみたい都市の一番とも二番ともいわれるようだ。

全面開放された旅順地区、そして未来に向かって発展しつづける大連を今後とも毎年訪ねるつもりでいる。

私の四川省一人旅 [44]

理塘の街で 4 〈神の岩山と鳥葬の丘Ⅱ〉

田井 元子

怪しい鍾乳洞の岩山と鳥葬場をハシゴして一日中一緒に過した私と運転手が、その日の出発点となったバスターミナル脇の食堂に帰ると、朝の女将が二人の顔を見比べクスクス笑いながら迎えてくれた。

「今日は楽しかった？ 彼は良い運転手だったかしら？」

「ええ、とても。」

私も苦笑いしながら答えた。ついさっき、腹がすいたから何か喰おうぜと誘われて、体よく奢らされたばかりだ。運転手はこの店の常連仲間なのか、店にいた顔見知り達を見つけると一緒に座り込み、「あの日本人女はとんでもない物好きだぜ」とでも話しているらしく、私を指差しながらニヤニヤしている。

身体の芯の方にはまだ鳥葬場で受けた重い興奮の余韻が残っていた。気持ちは高揚していたが、身体はいつになくグッタリと疲れた気分だ。泊まっている宿の入り口に掲げてある理塘周辺地図には街の郊外に温泉の文字が付いた地名が書かれていたのが思い出された。

8月とはいえ、標高が4千メートルにもなる理塘の夜はかなり冷え込むのだ。ところが昨夜使ってみた宿の共同シャワーは、お湯というより冷たくはない水と言った方が早い液体がシャワーの先から細々と流れ出てくるだけの代物で、ガクガク震えながらやっとの事で身体に付いている石鹸を流した私は、もう懲り懲りだった。稲城みたいに入浴できる施設があったら嬉しいんだけどな……試しに女将に尋ねてみたところ、あっさり「在るわよ」と嬉しい返事だ。

「バンザーイ!! 遠い？」

「彼のタクシーで行けるわよ。」

勿論、運転手は満面の笑みで飛んできた。

「いくら？」

「往復で30元」

「20元よ!」

宿に寄ってもらい着替えやタオルなどを準備してきた私を乗せて、車が街の目抜き通りを走り抜けようとしていた時だ。西洋人の旅行者がこちらに熱い眼差しを向けているのに気付いた運転手は「ちょっと待ってくれ」と私に告げて車を止めた。キリストのように髪とヒゲを伸ばした大柄な西洋人の青年が車に近づいてくると「ヘイ、タクシーだよな？ 康定まで行くかい？」と話しかけて来た。仲間達と理塘からタクシーをチャーターして康定まで行きたいらしい。勿論、運転手は大乗り気だ。片言ともいえないような英語を操り、康定までは500元だと胸を張って答えている。キリストは「高いな」と顔を曇らせ「ちょっと考えさせて欲しい」というような返事をした。運転手はすかさず手帳の切れ端に自分の携帯番号を走り書きすると「その気になったら電話してくれ」とキリスト青年に手渡した。

長期旅行者は誰もが少しでも長く旅を続ける為に、出来るだけ旅費は切り詰めたがっている。だが運転手にしてみれば舗装状態も良くない悪路を長距離走れば、車も痛むしガソリンも喰う。今朝はバナナの叩き売りで一日私のお抱え運転手になっていた彼が、値下げ交渉に入らなかったところを見ると、500元は譲れない金額なのだろう。

私を乗せたタクシーは街中を走り抜けると、草原を切り裂くように真直ぐ延びる一本道を、風を切って走り出した。理塘は大草原の真ん中にある街なので、どちらの方向に走り出してもすぐに草原の真ん中に飛び出してしまふのだ。車のフロントガラスいっぱい広がる、薄桃

色に染まりかけた空を遮るものは何も無い。開け放った窓から吹き込む風が気持ち良かった。

運転手は私を温泉まで送り届けると、2時間後に迎えに来る約束をして一旦街へ戻っていった。

理塘の温泉は細長い建物の中に個室に仕切られた浴室が並んでいて、受付でお金を払うと係りの少年が空いている個室の鍵を開けてくれた。浴室の中は3、4人は一度に入れる広さの湯船と洗い場があり、脱衣場は洗い場の隅のベンチだ。洋服やタオルがかけられるように壁に釘が打ってある。

掲げてある料金表を見ると数人で一緒に入浴する方が割安になるようで、夫婦か恋人同士のカップルや、数人の青年グループなどが一つの個室から出てくる姿もあった。私は一人で使うには贅沢なような広いお風呂場を借り切って思い切り寛いだ。ああ〜〜、お風呂ってなんて幸せなんだろう〜〜。寒さに凍えながら半端に身体を流しただけの昨夜のシャワーと比べたら天国と地獄だ。

約束の時間まで好きなだけ温泉を堪能した私が、湯気を上げながら外に出て涼んでいると、すぐに運転手が迎えに来てくれた。どうやら私が温泉に入っている間にいいお客を捕まえたらしい。

「明日の朝、康定まで500円で客を乗せて行くぜ。」

運転手の声は弾んでいる。それではあのキリスト君が折れたのかしら？だが私にとってそんな事はどうでも良かった。

「じゃあ私との約束はどうなるの!？」

私が口を尖らせる。先ほどの鳥葬場で知った明日の葬儀を見に行くために、早朝から運転手に車を出してもらった約束をしていたのだ。

「大丈夫さ。小姐を鳥葬場まで送ってから出発するよ。だから俺は葬儀にはつきあえないけどな」

既に気心のしれた運転手兼ガイドになっている彼が、一緒に居ないとは少し心細い気もしたが、とにかく鳥葬場まで行かれるなら問題無い。葬儀は早朝から行われるという運転手の話に明朝6時に迎えに来て貰う約束をして運転手と宿の門の前で別れた。

四川省の日の出は遅い。朝の6時はまだ深夜のように真っ暗だ。運転手はなかなかやって来なかった。やっぱりすっぱかし？業を煮やした私が、宿から運転手の携帯番号に電話をかけると、その電話で目を覚ましたような運転手の声が聞こえてきた。「判ってるさ。すぐに行くから・・・」との言葉にホッとす。多少時間に遅れたところで、こんな土地での口約束はちゃんと来てくれるだけで上出来なのだ。

人気のない街を通り抜けて暗闇の中を鳥葬場に向かう

途中、相変わらず運転手は私を怖がらせようとアレコレ言ってくる。そういえば子供の頃はお化けが怖くて夜がくるのが嫌だった。母に頼まれたゴミ捨てに、ドアを開けた数歩先にある団地のダストシュートまで行くのにもビクビクし、暗い部屋で目を閉じるのが恐ろしくて毎晩電気を点けたまま眠っていた頃もあったが、大人になった今、お化けなど少しも怖くない。それより生きている人間の方がずっと危険で恐ろしい事を、もう知っているからだ。きっと暗闇の鳥葬場に近づく事を恐れていたのは運転手の方だったのだろう。

車は昨日訪れた鳥葬場に到着した。7時になってもまだ辺りは薄暗く、私達の他には誰もいない。暫く車の中で運転手と話しながら待っているうち、徐々に辺りが明るんできたが、それでも葬儀の人達はやってくる気配もなかった。

「本当に今日の!？」

「だって、彼等がそう言ってたんだから間違いはないさ」

運転手はバツが悪そうにそう言うと、そわそわと腕時計を見て「俺は康定に行く客との約束があるから、そろそろ戻らなくちゃならないんだ」と告げた。その話は昨日から聞いていた事だから仕方がない。彼にとってはせっかく捕えた大きな仕事だ。

「いいわ。あなた帰りなさいよ。私は一人で葬儀の人達を待つから」

「ええ!？あんた一人で此処にいるつもりか!？」

運転手はギョッとしたように私を見返した。

「ええ、大丈夫よ」

そうは言ったものの車を降りてみると標高4千メートルの朝は物凄く寒かった。ビョウビョウと草原を吹き渡る風に吹かれ、寒さに耐え切れなくなった私はザックの中からピンク色の雨合羽を取り出して着込んだが、それも大して防寒には役立たない。

「本当に一人で此処にいられるのか!？あんた怖くないのかよ!？」

一緒に車から降りた運転手は何度も繰り返したが、本当に怖くは無かった。

「大丈夫。もしお化けが出てもチベット語は判らないから怖くないよ」

怖くはないが、寒くて寒くて堪らない。私達のいる丘から見下ろすと、少し離れた場所に遊牧民のテントが一つ立っているのが見えていた。火を焚いているらしく白い煙が上がっている。

「ねえ、お願い!あなたが一人で先に帰るのは構わないけど、寒すぎて此処にはいられないよ。あのテントの人にお願ひして、葬儀の人達が来るまで私をテントの中に入れてくれるように頼んでくれない?」

「ええっ!？」

運転手は更にギョッとしたような顔を見ると、激しくかぶりを振った。

「何で!？」

「ああいう奴らとは話した事ないんだ」

運転手の拒絶の激しさが不思議に思えた。私から見ればみんなまとめて理塘の住人と思っていたが、もしかすると街で暮らす人間とテントで暮らす人間の間には目に見えない境界線のようなものがあるのだろうか？だが、この時はあまりの寒さにそんな事には構っていらなかった。

「何言ってるのよ!! こうなったのもあなたの責任なんだから何とかして!!」

別に彼に非がある訳でもないのだが、気の悪い運転手は私に言い負かされると諦めたようにテントに向かって歩きだした。

テントの中に顔を入れ話していた運転手が、少し離れて待っていた私を呼ぶと

「中に入って良いと言われたから、ここで葬儀の奴らが来るのを待てよ。じゃあ俺は行くからな」と去っていった。

初めは寒さから逃れたい一心の思いつきだったが、改めてそうしてみるとこの思いがけない展開にはワクワクした。私の様な旅行者が遊牧民のテントに入れる機会など、そうある事ではないだろう。以前初めてこの地を訪れた時にも、案内人の烏里氏の手引きで遊牧民のテントに立ち寄った事はあったが、そんな観光旅行の延長と今回の訪問は私の中でちょっと意味合いが違うのだ。

「你好!」中に足を踏み入れると、テントの中には姉妹なのか嫁姑の関係なのか歳の違う二人の女性と子供達が居た。歳若い女性の方が、特に歓迎する風でもなく私をテントに招きいれると中央にあるストーブの脇に座らせてくれた。テントが風を防いでくれるし、ストーブの熱で中は意外に暖かい。あぁ～助かった。凍えていた私は胸をなでおろす。小さなストーブの中では牛の糞がチロチロと青い炎をあげていた。年配の女性の方は海辺で見かけるデッキチェアのようなベッドで、小さな男の子と一緒にまだ毛布に包まっていた。裸んぼでテントの外に掘った穴にトイレを済ませていた5、6歳位の女の子は、私をみると恥ずかしそうに笑顔を見せた。

テントに戻ってきた女の子は洋服を着ると、今度は洗顔フォームを使い、溜めてある水で洗顔している。こんなテント生活をしている子供が洗顔フォームを使っているのは驚きだ。何かといえばチベット人は身体を洗う習慣が無いなどの話を聞いていたが、そんなのは嘘か昔の話だ。この土地のチベット族は温泉で入浴もすれば、テントで暮らす小さな子供でさえ洗顔フォームで顔を洗うのだ。お化粧品もしない彼女にはそんな物必要ないのでは

と思えたが・・・。

私はザックの中からいつでも持ち歩いている折り紙を取り出すと鶴や花を折り、突然現れた異邦人を興味津々で眺めている女の子にあげた。自分の姉が新しい遊び相手を得ているのを見た男の子も毛布に包まれた祖母(?)の胸の中から這い出してくる。子供は裸で寝る事になっているのかやっぱりスッポンポンだ。

私子供達と遊んでいるのを微笑みながら眺めてはいたが、大人の女性二人は基本的に私には全く興味が無いようだった。「あなたは何をしてるの?」と聞かれ「鳥葬が始まるのを待ってるの」と答えると、「ああそう」といった様子でその後話しかけてくる事も無い。

どこへ行っていったのか子供達の父親らしい青年がバイクに乗って戻ってきたが、やはり私には興味を持つことなく、すぐにまた何処かへ出かけて行ってしまった。放っておいてくれる事は気楽で良かった。自分で歩き回れるようになったばかりといった年頃の男の子はなかなか腕白そうで、起きだしてくるとクキキキ・・・と笑いながら、テントの真ん中でオシッコをしたりする。彼の表情を見れば、明らかにそれが憚られる行為であることを判ってやっている確信犯だ。お姉ちゃんは「あー!」という顔をして口元に手をやると私を見て笑った。オシッコはすぐに土に吸い込まれてしまい、母親らしい女性はそれには構わずに子供に洋服を着せると食事を与えた。

子供達の朝食は昨日の残り物なのか、鍋に残っていたオジヤの様な物だ。腕白そうな男の子は旺盛な食欲で冷えたオジヤ(?)をスプーンですくってはモリモリ食べていたが、大人達の食事は麦焦がしのような粉を水で捏ねて食べるだけだ。あらかじめ得ていた知識でそれがツァンパと呼ばれるチベット民族の主食となる食べ物だとは判ったが、実際に彼等が食すところを見るのは初めてだった。それはどう見ても活動のエネルギーとして食物を摂取するだけの行為で、特別な日を除き彼等の日常生活に食の楽しみという物は存在していないように思われた。

あっという間に食事が終わると、母親は娘の髪の毛を頭の上で二つに分けて可愛らしい髪飾りのついたゴムで結び、日焼け止めか荒れ止めなのか、薄赤い色の付いた油のような物を頬に塗ってあげている。お化粧品が済んで私を振り返った少女の顔は頭の上にフワフワしたピンク色のボンポンを二つ並べ、ほっぺたが丸く真っ赤に染められた上に、唇も口紅のように赤く塗られている。

まるで舞台化粧のようなその可笑しさと可愛さに、私は声を上げて大笑いしてしまった。私が笑うので少女はわざとおどけた表情をして見せる。カメラを持っていなかったのが本当に本当に残念だ。男の子もほっぺたを赤く塗ってもらっている。二人とも目がキラキラしていてもとっても可愛い。

いつの間にか日は高く昇っていた。子供達の世話を終えると女たちはテントの外に出て行ってしまい、腕時計を眺めると時刻は既に9時を過ぎている。時折表に出て鳥葬場の方を眺めていた私だが、運転手の情報はやはりガセだったらしい。それはそれで残念だったが、私はこのテントに来られた事ですっかり満足していた。

日が昇るにつれ気温が上がり、全く寒さを感じなくなったので雨合羽を脱ぎテントの表に出た。二人の女性達はテントの前に作られた畑で働いていた。私について外に出てきた子供達は早速その辺に落ちている木切れを使って遊び始めている。ふと見るとテントの脇に刃を上に向けた状態でクワが放り出してあるのを見つけた私は、慌てて刃を下向きに置き直した。もし子供がその上に転んだりしたらと思うとゾッとする。小さな子供達がいるというのになんて無頓着なんだろう。ここの子供達を見ていたらやれ哺乳瓶の消毒だ殺菌だ、子供の喧嘩だ幼稚園の安全管理だと壊れ物を扱うような日本の子育てとの差に唾然とするが、これだけ放っぼり出されていても、子供達はノビノビと元気いっぱいに育っている。

子供と遊ぶのが好きな私は長い木切れを二本使い、小さな男の子を真ん中にして三人並ぶと、ポップーと電車ごっこをして見せた。ここの子供達は電車の存在など知らないだろうが、三人で二本の棒に捕まり歩き回るのが楽しくて子供達は大喜びだ。おもちゃなどなくても子供はそこにある物を使って遊ぶので、そんな物は必要無いのだと改めて気付かされた思いだ。これですっかり懐いてくれた子供達は私の手を引き、先に立ってテントの周りをあちこち案内してくれる。会話は全く通じないが、子供と遊ぶのに言葉など全然必要ない。

しかし辺りは草原とはいっても地面は平らではなく、湿原のような場所もあり小さな小川の流れる場所もある。小川の淵に身体を乗り出し、泳ぐ小魚を指差して見せてくれる様子や、まだおぼつかない足取りで、でこぼこした地面を歩く男の子の姿に、私はハラハラしっぱなしだ。つい手を出して引っ張ったり身体を支えたりしてしまうのだが、その度に余計な事をするな！とでもいう様にその手を振り払われてしまう。たとえ転んでも彼はへっちゃらだ。助け起こそうとした私はまた腕を振り払われる。

チベット東部に当たるこの地方一帯はチベット語で『カム』と称され、カムパと呼ばれる土地の男達はチベット族の中でも特に勇猛で誇り高い事に名を馳せているそうだ。まだよちよち歩きの年頃にして、この少年も誇り高いカムの男だ。子虎を模したジャンパーを着せられているのが可愛らしく、幼いながらも野生の輝きを放つ瞳の彼が、虎の耳が付いたフードを被っている姿は、まるで本物みたいに野獣の子を連想させた。

子供達と走り回って遊んでいるうちに、あれ程寒かっ

たのが嘘の様に暑くなってきた。太陽さえ昇ってしまえば、下界よりもその距離が近い分だけ8月の太陽の光はジリジリと照りつけてくる。時間を見れば既に11時近くになっていた。子供達と遊んでいるのは楽しかったが、私がそこで過している意味も無くなったので、そろそろ街に戻る事にした。

ゼスチャーで自分が帰る事を子供達に伝えたと、途中まで送ってくれるつもりのように付いてくる。「じゃあ、あそこまでね」と鳥葬場とこちら側の境を目指し三人で手を繋いで歩いていると、少しテントから離れたところで、心配した母親の呼び声がしたので、そこで子供達とは手を振ってお別れした。

子供達と過した時間の甘い余韻に浸りながらも私の胸の中は大きく揺れていた。大草原の中、つつましく畑を作り、牛を飼い、その牛の糞を燃料として暖を取る。木も切らなければ過剰な二酸化炭素を放出させる事もなく、自然のリサイクルの環の中で営まれる彼等の生活・・・ほんのちょっぴり垣間見ただけだが、彼等のテントを訪れて私が感じさせられたものはとても大きかった。

テントに入りまず強い印象を受けたのは、一つの家族が暮らす生活の場として、驚くほどに物が無かった事だ。

このように自然環境の厳しい土地でも、人間は本来これだけで暮らしていけるのだという事実を目の当たりにして、私は少なからず衝撃を受けていた。

改めて日本の生活を思い起こせば、私達の生活はどれだけ余計な物を抱え込んでいるのだろう。アレが無ければ、コレが無ければ・・・と不安を募らせ、物欲に溺れ、経済的な利益ばかりを追求しては、その挙句に取り返しのつかないほどの環境破壊を引き起こし、自らの出したゴミの始末も付けられずに慌てふためく文明生活の愚かさ、滑稽さはどうなのだ。そんな人間の生活の皺寄せは地球上に住む他の自然動物達にまで甚大な被害を与え、今や地球さえ滅ぼしてしまいそうな勢いだ。

彼等の生活を貧しく遅れていると蔑み笑う文明国の人間は、頭を冷やすべきではないのか？ 地球の上で生かされている生物として生きるという事に、もっと謙虚にならなければいけないのではないのか？ 理塘の街を目指して歩く道すがら、私の胸の中にはそんな思いが取りとめもなく渦を巻いていた。

(続く)

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

2011年3月11日、私が住む相模原でも震度5という大きな地震になりました。その後続く停電、計画停電、余震、ガソリンや食料の不足、交通機関の乱れ、原子力発電所の爆発、被爆の恐怖など未曾有のことが次々に起こっています。

日常生活を続けながらも、恐怖・不安・心配は尽きません。しかし、ケニアから来た私の夫は、なぜか普通で、すべてのことがあまり気にはなっていない様子です。もともと楽観的な性格ですが、友人のケニア人女性の家へお見舞いに訪問した時も、彼女から受けた印象も同じようでした。「ケニアの人は、不安は感じないのか?」と私は疑問に感じました。

夫の職場は、実際は、建物が部分的に倒壊し、暫くは仕事が出来ない状態になっています。地震が起こった当日、彼はたまたま休日でも遠方へ出掛けていましたので、電車が止まり被災難民になりました。電話も繋がらず心配しましたが、やっとの思いで帰って来た時も普通にいつも通りに「ただいま」の一言でした。「大丈夫だった? とか、何か他に言うことはないのか?」と私は思いました。又、ガソリンがない、灯油がない、水が危ない…等々言われていますが「だから何?」という感じで慌てもしないし、何かを備蓄することはありません。

そもそも彼が生活していたケニアの、特に農村部での生活は、地震直後のライフラインがない状態と同じです。夜になると、小さな灯油ランプやろうそくで部屋を灯し、水は川や井戸から汲んできてタンクに入れてあるものを適宜使うか、家に備え付けてある大きなタンクに溜めた雨水を使うか、火はマッチで点火し、石炭か薪を使って料理をします。その日の食べるものは、畑から収穫してきてその日のうちに食べます。忘れてはいけないのが、常用してある「保存食」です。蔵に入れて乾燥させた各種さまざまな豆類やとうもろこし、小麦粉、米などは、収穫するものがなかった時や冠婚葬祭などの時に食べます。

仕事で都市へ出る前の26年間をこのような生活をしてきた彼は、生活に必要なすべての物を自分自身で、土・水・火から作り出す事が出来ます。

日々の生活の体験から、人が生きる為に何がどれくらい必要なのか。種から野菜のなるまでにどれくらい時間がかかるのか。夜になって見えなくなる前に、明

る朝・昼の間に何をしておかなければいけないのか。水は一日どのくらい必要で、雨が降らなかったときのためにどれくらい溜めておかなければならないのか。保存食料はどのくらいあれば収穫がなくとも生きていけるのか。何かを煮炊きするのに必要な燃料はどのくらい必要なのか。人はどれだけ食べればどれだけ動けるか。

一言で表せば、「どうすれば人間は生きられるか?」を考えなければならない状況を子供の頃から繰り返し体験しながら成長して来ているのです。彼が生きてきた毎日の生活には水道も、ガスも、電気もありません。あるのは、土と水と火だけなのです。

生まれたときからインフラが整備され、生活の基本的な部分で時間や労力を使うことが少ない私には、「非常のための備え」を用意することは必要です。日本での生活では野菜を育てる知識も、水を汲むことも薪を拾うことも必要ありません。しかし20代の後半の2年間をケニアで過ごした生活は、今にして思えば、生きる為に必要な「知恵」をいろいろ教えてくれたのだと、今回の地震で気が付きました。

津波や地震で亡くなられた方や被災した方の悲しみ、苦しみは他の何にも比べられるものではありません。原発に関わる事故も他に類を見ない災害です。しかし、日常的に人の死が身近にあるアフリカは、人間はすべてを乗り越えていく力があると教えてくれます。アフリカの人々が、日々絶望の中に見る希望や悲しみの後に知る喜びを、私は日本人の人々もきっと見出す日が来ることができると信じています。

在日のケニア人の言葉。

「人生は希望に満ちている。そう信じさえすれば」

「知恵を味方につければ、人はどこにいても生きて行ける」

私のもとにはアフリカからも沢山の激励の言葉が届いています。私から見れば、激励の言葉を送ってくれる彼らの状況も辛い事実を沢山抱えています。以前、わりい紙上でも紹介した失踪中の叔父さん家族からも「頑張って、日本」と電話で心配してくれています。

まずは今の生活を見直しながら、便利さに頼り過ぎない生活を心がけて、自分で生きる力を忘れないように努めたいと思います。

イエリンさんは、本来は1989年、中国魯迅美術大学卒業後に来日の、イラストレーターです。2006年、双子の坊やお母さんになり、坊やちゃん達が保育園に通い始めたのを機にキャラクター弁当を手掛け始め、ご自身のイラストのように彩り美しいセンス溢れたお弁当作品は、次々、サンリオ、バンダイなどのコンテストで受賞し、一昨年から中国の大手育児雑誌・三誌が取り上げて、お弁当を通しての親子コミュニケーション記事連載中です。

昨年来、'わんりい'紙にもイエリンさんのイラスト(こちらは墨絵の闊達な力強い作品)を掲載頂いていますので、お名前が気が付かれた方もいらっしゃるかもですね。

さて、講座は、韓国籍の女性の方を初め、多数の若い女性の参加で、日頃のわんりいの活動とは雰囲気異なる催しでした。'作った自作のお弁当はお持ち帰り'ということで、明るい笑い声が飛び交いながらも、皆お子さんやお孫さんの顔を思い浮かべながら真剣にお弁当作りに集中しました。出来上がったお弁当作品は掲載写真の通りで、基本的な素材は同じにも拘らず一つとして同じものはない個性的なものが出来ました。

一見、手が掛かって面倒そうに見えたキャラ弁ですが、実際手がけてみますと、例えばハムでもそのままべろりと



講座参加者の皆さんの作品を並べてみました

お弁当に入れるのでは形になりにくいものでも、二つ折りにして刻みをいれくりと巻くとお花のような立体形になって可愛らしく、お弁当が華やぐばかりでなく詰めやすくもなるなど、要は、イエさん曰く、「アイデアによる素材の変身術で如何様にも楽しいお弁当にする」のがコツだそうです。形づくりに使うヨウジは、子供には危ないので、スパゲッティをポキポキ折って使うなどの心遣いにも感心しました。

お弁当ばかりでなく、日常のお皿にもアイデアで楽しさを盛り込めたいと思った催しでした。テーブルを部屋の真ん中に寄せて囲み、賑やかに昼を頂いて解散しました。(田井)

《'わんりい'掲示板》

【わんりいのクッキング講座】

その道のプロに教わる

美味しい手作りクッキー3種と生チョコの会

参加会費：1500円/募集人数：15名～20名

講師担当の足立晃一さんは、長年洋菓子にかかわるお仕事をしてこられました。昨年教えて頂いたクッキーは、癖のない上品なテイストで好評でした。今年は、昨年のレシピをもとに更なる腕前の向上を目指します。コツさえ分かればどなたでも作れます。

初めての方も是非、ご参加ください。

2011年4月29日(祭) 13:30～

会場：まちだ中央公民館6F・調理室

JR横浜線「町田駅」ルミネ口徒歩3分/小田急線「町田駅」南口徒歩5分

▲コーヒータイム：焼きあがったばかりのクッキーを一緒に頂きましょう!

▲クッキーのお土産付きです。

持ち物：エプロン・筆記用具・クッキーを入れる容器

申込&問合せ：☎042-734-5100 わんりい



「スリランカ旅行に参加しませんか」

期日：7月16日(土)～10日間程度(希望により調整可)

費用：約20万円(参加人数により、多少変動)

申込期限：5月10日

▲スリランカのユネスコ文化遺産をはじめとして、キャンディ、ヌワラエリア、ビーチ、野生動物園、コロombo等を訪問します。

▲現地の村やスリランカ人の家庭訪問も予定です。

●問合せ&申込み：☎042-735-9583

E-mail：tamegai1014@yahoo.co.jp

為我井輝忠(日本スリランカ文化交流協会)

ジャン シャオチン

姜小青・第6回『弦之縁』フレンドリーコンサート

6月3日(金) 19:00～(開場：18:30)

会場：めぐろパーシモンホール 小ホール

(東京都目黒区八雲1-1-1)

¥4,000(当日：¥4,500) 全席自由



共演：馬平(打楽器)/『ユニット悠風』海老原真二(キーボード)

大久保祐子(バイオリン) ゲスト：賈鵬芳(二胡)

主催：姜小青フレンドリーコンサート実行委員会

申込&問合せ：☎080-1304-7347(村山) FAX：045-313-5188

【4月の定例会と5月号の発送日】

◆定例会：4月8日(金) 13:30～(田井宅)

*参加前にお問い合わせを

◆5月号おたより発送：5月2日(月) 13:30～(田井宅)